

1. テキスト

「六 力と意志との媒介としての内的知覚」（63 頁後ろから 4 行目から）「七 内的知覚と力の意識との媒介としての確信、確信と明白」（66 頁後ろから 5 行目まで）

2. テキスト要約

西田は「物理的世界（力の世界）」を「意志の自覚」から構成しようと試みる。その際「内的知覚」をその間に挟む。内的知覚だけでは夢か事実かも分からないが、その根柢に自覚があることによって内的知覚は事実となる。同時に感覚と思惟が結合する。また内的知覚のみでは布伦ターノの所謂「直視様相」しかない、即ち現在の時間空間しかないが、内的知覚の奥底（自覚）があることによって、それが「斜視様相」を含み、時間的關係、空間的關係も成立することになる。さらに布伦ターノが時の変化を第一次的と考え、場所的变化を第二次的連関と考えているように、確かに内的知覚自身は時間的と考えられるが、自覚を根柢に持つ内的知覚は内に時間と空間とを含んでいる。

こうして自覚を根柢に持つ「内的知覚の立場」が成立するが、西田はこれをカントの「数学的原則」に重ね合わせる。ここでは外延量と内包量（度）のみがある「記述的」な「知覚の世界」であり、「力の概念は成立しない」。しかしこの「内的知覚の立場」を超越して「意志の自覚の立場」に立つことによって、「力学的原則」の世界即ち「経験の世界」へと移行する。実体属性關係、因果關係、相互關係、可能、現実、必然の様相のもとに経験を構成する立場である。ここにおいて「力の概念」が成立し、かくして「力の世界」が構成されることになる。

西田はこの「力」を時間、空間、質量を統一するものでなければならぬと考え、相対性原理の物理学における「四元力」（四次元ベクトルで表される量）や「エネルギー運動量テンソル」（ $E=mc^2$ （ E はエネルギー、 m は質量、 c は光速）において、質量とエネルギーが交換可能であることから、両者をいっしょくたにした空間のエネルギー（物質とその場が持つエネルギー）が、物理現象の真相に徹底したものであると考える。

七 「内的知覚と力の意識との媒介としての確信、確信と明白」

西田は「内的知覚」と「力の意識」の關係を明らかにするためにさらに「確信（Überzeugung）」と「明白（Evidenz）」の両概念を援用する。「内的知覚」は「確信」の意識と切り離すことができない。何故ならばそこにおいて主客合一が成立しているからである。我々はここにおいて『善の研究』の次の表現を思い起こす。

さらば疑うにも疑い様がない直接の知識とは何であるか。それはただ我々の直覺的經驗の事実即ち意識現象についての知識あるのみである。現前の意識現象とこれを意識するということは直に同一であって、その間に主観と客観とを分つこともできない。事実と認識の間に一毫の間隙がない。真に疑い様がないのである。（岩波文庫新版『善の研究』66 頁）

「確信」を「疑うにも疑い様がない」、「内的知覚」を「意識現象」と置き換えればそのまま『善の研究』の表現となる。この「確信」の上に事實的真理も一般的真理も成立し、この時「所謂個人的自己」を超越して「その一々が内的知覚を有つ無限なる自己の上に立つ」とされる。これに関しても以下の表現が『善の研究』に見られる。

この意識統一の範圍なる者が、純粹經驗の立場より見て、彼我の間に絶對的分別をなすことはできぬ。もし個人的意識において、昨日の意識と今日の意識とが獨立の意識でありながら、その同一系統に属するの故を以て一つの意識と考えることができるならば、自他の意識の間にも同一の關係を見出すことができるであろう。（同 74 頁）

幻覺や錯覺のようなものに対しても人は確信を抱くが、これについて西田は布伦ターノの「意識の強度」と「確信」の區別に従って、「強度」の方は（個人的な）「感覺的意識の様相」であり、幻覺や錯覺はこれに属するとする。これに対し「確信」は「超個人的な

る思惟の意識の様相」だとする。このように区別は一応できるが西田はこれらはともに意識の様相であるとしている。

ところが西田によればこの「確信に於ては、我々は尚真に自己を超越して、客観的なるものに直接するとは云われぬとも考え得るであろう」と述べている。これは『善の研究』にはない発想である。『善の研究』では「意識現象についての知識」は「直接の知識」としてどこまでも主客合一的に「直観」の事柄であった。ところがこの論文では後に出て来るように「確信」においてはなお「意識我を離れない (68 頁)」とされる。

「純粹経験がある」あるいは「純粹経験が疑い様がない」というのはすでに判断である。純粹経験の中にはこのような判断はできない。そうであるなら「確信の意識」は「意識現象についての意識」として意識我を離れないことになる。それでは我々はどのようにして「真に自己を超越して、客観的なるものに直接」できるのであろうか。西田は「明白の意識」がそれであるとする。何故そう言えるのか。「意志の窮する所 (66 頁)」で「意志が自己自身を失 (65 頁)」って「客観的なる或物を見る (66 頁)」からである。そのように西田は考えている。しかし「明白なものは疑い様がない」というのも意識 (反省) である。こうなると如何にしても「明白」に到達することはできないのではないか。しかしこれこそが西田の言う「意志の窮する所」ではないだろうか。この「意志の窮する所」から「客観的なる或物を見る」に到る過程は『善の研究』では第 3 編から第 4 編の「見神の事実」に到る過程を思わせる。

西田はこの「明白の感情」は「純理的知識」においても「事實的知識」にも不可欠であると考えている。事実というものはどこまでも分からないものであるとしても、「これが事実だ」と言うるためには「明白の感情」がなければならぬということであろう。

さらに西田はメーン (メーヌ)・ドゥ・ピランの「受動的印象」と「能動的印象」の区別を用いて「確信」と「習慣」の関係を説明する。受動的印象は習慣によって消されていくが、能動的印象は習慣によって明らかになる。確信は後者であり、西田は例として技術の修練を挙げている。この点についても『善の研究』の「知的直観」が想起される。「知的直観」は「技術の骨の如き者」であり、「すべて我々の熟練せる行動においても見る所の極めて普通の現象」である。そうして「普通の心理学は単に習慣であるとか、有機的作用であるとかいうであろうが、純粹経験の立場より見れば、こは実に主客合一、知意融合の状態である。物我相忘じ、物が我を動かすのでもなく、我が物を動かすでもない、ただ一の世界、一の光景あるのみである」と言われる。(『善の研究』同 59 頁)

ところが西田はこうした「確信」と区別して「明白の感情」を次のように語る。

併し芸術的作用の如きものに至っては、此感情が遂に一種の明白の感情に近づくと考えることができ
る。我々は是に於て客観的なる或物に直接するのである。(66 頁)

『善の研究』ではつねに「宗教」「道徳」「美術」は「極致」「極意」として扱われ、「知的直観」の章でも、「技術の骨の如き者」より「一層深く云えば」という仕方で「美術の精神の如き者」について次のように語っている。

例えば画家の興来り筆自ずから動く様に複雑なる作用の背後に統一的或る者が働いて居る。その変化は無意識の変化ではない、一つの物の発展完成である。(『善の研究』同所)

『善の研究』では「習慣」の如き「我々の熟練せる行動においても見る所の極めて普通の現象」を「一層深く」したものが「美術の精神」であるように読めるが、「物理現象の背後にあるもの」ではそこに「意志」が「窮する」という契機を認め、そこに「客観的なる或物を見る」とされる。しかし『善の研究』においても第 3 編末尾の「意志の窮する所」に「宗教的要求」が起こっている。そうして「学問道徳の本には宗教がなければならぬ(『善の研究』同 62 頁)」と言われるように、「意志の窮する所」で「学問」「道徳」「芸術」のもととなるような広い意味での「宗教的な要求」が我々の自己に起こり、それが本となって「学問」「道徳」「芸術」「宗教」の極致が可能となる、そのように読むべきであろう。

(佐野記)